

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
October2026

No.52 JOINT : つなぐ/つながる
いのちとつながる

社会が目まぐるしく変わり、多様性が問われる時代。私たちは、これまでの価値観のままでいいのだろうか。今号は「いのちとつながる」をテーマに、人間中心主義の先にある社会を考えます。



私は大学で教鞭を執る哲学の教員・研究者であるが、この十年ほど、ずっと無人島のことを考えている。その問題意識を説明するために、幼い日の私の不思議な経験について話をさせていただきたい。

幼稚園に入るか入らないかの頃、私には、住まいが遠く離れていたために年に一度か二度しか会えない友人がいた。会えた時は毎回、一日中一緒に遊び、夕方にはお別れする。それが何度かあった。

不思議な経験は、毎回、彼と別れた後の夜に起こった。彼はもう自分の目の前にはいない。どこか私の知らない場所にいるのだろう。ところが、私にはそれがどうしても理解できなかった。彼が消えてしまったはずがないと分かっていた。だが、彼が自分の目の前にいないにもかかわらず、どこかに存在し続けているという事実がどうしても腑に落ちなかったのである。

この不思議な経験をずっと気にとめていたわけではない。ところがある時、それを鮮明に想起させる事態に遭遇した。私の研究している20世紀フランスの哲学者、ジル・ドゥルーズの論文「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界」を読んだ時である（『意味の論理学』、小泉義之訳、河出文庫）。

ドゥルーズはの中で、自らの友人でもあった小説家、ミシェル・トゥルニエの小説『フライデーあるいは太平洋の冥界』（榎原晃三訳、河出書房新社）を論じている。この小説はダニエ

見えていないものは、彼女にとって存在していなかった。

私はこの経験が必ずしも特定の「障害」に基づくものではなく、何らかの理由で「他者なき世界」を生きるようになった場合に発生するものではないかという仮説を立てた。そして医学者と哲学者の友人たちとともに研究グループを立ち上げ、「哲学、医学、精神分析の融合による自閉症の学際的研究——新しいダイバーシティ概念の創造を目指して」というテーマのもと、ト

無人島の哲学と自閉症研究

東京大学大学院総合文化研究科教授
國分功一郎



映画の撮影風景



ル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』に取材した作品で、無人島でのロビンソンの精神の変容を驚くべき緻密さで描き出している。ドゥルーズが論じたのは、その変容の哲学的な意味である。

無人島とはまさしく「他者なき世界」だ。そこでは不思議なことが起こる。自分に見えていないものの存在が信じられなくなるのだ。なぜだろうか。ドゥルーズはこのように説明する。私たちは自分には見えていないものを、他者には見えているものとして処理している。知覚の一部を他者に託しているのである。他者がいなくなれば、その処理はできない。無人島の上のロビンソンにとっては、自分に見えているものが世界であり、世界とは自分に見えているものである。

私はあの不思議な経験がはじめて説明されたと思った。幼い頃の自分はおそらく、他者がこの世界には存在していて、自分には見えていないものを自分の代わりに見てくれているという感覚を十分に持ち得なかったのである。

更に驚いたのは、無人島のロビンソンと極めて似た経験が、自閉症（正確には自閉スペクトラム症）の診断を有する作家、グニラ・ガランダの自伝の中にも見いだされたことだ（『ずっと普通になりたかった』ニキリンコ訳、花風社）。ガランダは幼い頃、自分の家の前にある他人の家に内部があることがどうしても分からなかったという。内部は見えていない。

ヨタ財団に2019年から助成金をいただいて研究を進めてきた。

文系の共同研究というと最後に共著を出版して終えるのが通例であるが、私たちのグループは自分たちの研究成果を広く社会に知ってもらえるやり方が必要だと考えた。私たちが出した結論は映画制作である。慣れないプロジェクトであったため、ずいぶんと時間がかかってしまったが、現在、一般公開を目指して最終的な作業を進めている。

JOINT October 2026 No.52



Photo by Natsumi Washizawa

秋田県五城目町の朝市通りにある、まちのリビング「貸し棚『おうみや』」。格子状に区切られた正方形の貸し棚は、「趣味の棚」と「ショップ棚」の2種類があり、1月1000円で利用できます。思い思いの作品や商品、おすすめの書籍が並べられ、地域内外の方々が緩やかにつながる交流スペース兼小さな商いの実験場となっています。（P.32参照）

CONTENTS

FIRST WORD ● 國分功一郎
無人島の哲学と自閉症研究 …… 2

JOINT：つなぐ／つながる
いのちとつながる

50周年記念助成 特別対談 竹下昌志 × 大石友子
差異を見つめ、普遍を問う …… 5

国内助成・研究助成・国際助成プログラム
2026年度プロジェクト一覧 …… 13

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿
国内助成プログラム ● 奥田裕之
お寺とNPOがつくる、新しいコモンズ …… 16

外国人材の受け入れと日本社会 ● 弓野 綾
「外国人」と「医療」の間に、確かな入口をつくる …… 18

先端技術と共創する新たな人間社会 ● 本嶋孔太郎
「決めなくても前に進む」仕組みをつくる …… 20

トヨタ財団×IFI ● 汪 慧心／エミリー・チェン
新たに2名が着任しました！ …… 22

「私」のまなざし 46 小林正法
「忘れる」ことの利点 …… 24

活動地へおじゃまします！〈武蔵野市を訪ねて〉● 渡真利紘一
雨とのつきあい方を変える、「雨ともプロジェクト」 …… 26

研究助成×先端技術 合同合宿 in 鳴子温泉
地方と都市の「つながり」から考える未来 …… 29

トヨタ財団ジャーナル
国内助成プログラム同窓会企画 in 五城目 ほか …… 32

● 國分功一郎（こくぶん・こういちろう）

1974年生まれ。早稲田大学政治経済学部を卒業後、東京大学大学院総合文化研究科修士課程へ。博士（学術）。専攻は哲学。2026年4月現在、東京大学大学院総合文化研究科教授。主な著書に『暇と退屈の倫理学』（新潮文庫）、『天皇への敗北——シリーズ哲学講話——』（新潮新書）、『中動態の世界——意志と責任の考古学——』（新潮文庫）ほか多数。2018年度研究助成プログラム助成対象者。

50周年記念助成 特別対談

差異を見つめ、普遍を問う

——動物倫理学と文化人類学が会うとき——

Takeshita Masashi

竹下昌志

Oishi Tomoko

大石友子

ファシリテーター◎林知香

出会いのはじまり

——お二人は50周年記念助成で共に採択されたことをきっかけに知り合い、一緒に勉強会や研究会を重ねているそうですね。お互いに専門とする学問分野が異なり、研究アプローチの方法も違いますが、それぞれ普段はどのような研究をされていて、双方の研究にどんなつながりがあるとお考えなのか、今日はゆっくりお話を聞かせてください。

まず大石さんから、タイのゾウの研究に入られたきっかけと、そもそもなぜゾウなのか、そしてなぜ動物の権利に注目されたのか、お話をいただけますか。

大石 私は、研究ありきで今の調査地や対象を選んだというわけではないんです。研究を始める何年も前にタイ東北部のゾウの村の人びとと出会い、個人的な付き合いを続けてきました。きっかけは、高校生の時に貧困や障害などについて海外の現状を知りたいと思い、スタディツアーに参加したことでした。訪問先がタイで、スリン県の「ゾウの村」と呼ばれる地域を訪問しました。ホームステイで一年下の女子生徒の家に泊めてもらったのですが、彼女のお兄さんが韓国でのゾウ使用の仕事を終えて帰ってきたところでした。

韓国と日本は近いということで、お兄さんは韓国語と片言の英語と、彼らはクアイというエスニック集団なので母語であるクアイ語、そしてタイ語を使って私に話しかけてくれました。その際に、家族が総出で家のいたるところからゾウの写真を持ってきてくれ、

写真提供：大石友子



簡単に答えが出ないことに、根気よく付き合ってくれる——大石さんが竹下さんに向けて語ったこの言葉に、二人の対話の姿勢が端的に表れています。

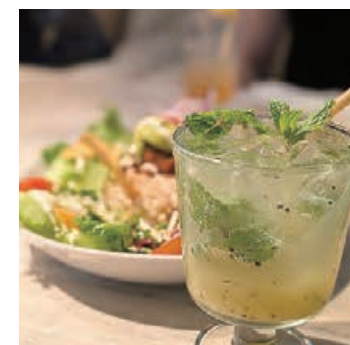
動物倫理学・AI研究者の竹下さんと、文化人類学者の大石さん。二人は2024年度のトヨタ財団50周年記念助成「50年後の人間社会を展望する」に採択されたことをきっかけに出会い、現在では異分野の若手研究者が集まる勉強会を定期的を開催しています。哲学と人類学、理論とフィールドワーク、普遍性と個別性。アプローチは異なりますが、「人間中心主義を問い直す」という共通の関心でつながる二人に、今回じっくりとお話をうかがいました。

対談の中で印象的だったのは、二人が複雑な問いを安易に単純化せず、むしろその複雑さの中に留まり続けようとする姿勢です。動物の権利とは何か。人間とは誰のことを指しているのか。共生とはどういうことなのか。こうした問いに対して、竹下さんは種差別を批判する普遍的な倫理を追求し、大石さんはその「普遍」の前提自体を問い返します。一見すれ違いそうな二つの視点が対話によって新たな地平を開いていく様子は、分野を超えた知的交流の豊かさを感じさせるものです。

学問とアクティビズムをどうつなぐか、当事者性をどう扱うか、AIと環境負荷の矛盾にどう向き合うか——対談は予定調和に終わることなく、率直な問いかけと応答が交わされました。その対話のプロセス自体が人間中心主義を超えた「Joint：つながり」の可能性を示しています。

JOINT：つなが／つながる

いのちとつながる



彼らと関係のあったゾウの話をしてくれました。何を言っているのか詳細はわからなかったのですが、彼らはゾウのことが大好きなんだということがわかる、とても印象的な光景でした。

スタディツアーを終えて帰国すると、何を学んだのかを報告する機会がありました。それがきっかけで気づいたのは、「数日間滞在しただけでは何もわからない」ということがわかったということです。たった数日だけの滞在では、なぜその人たちがゾウのことをこんなに愛おしそうに語っているのかはわからなかったわけです。また、当時ゾウの村のゾウのほとんどは出稼ぎに出っていたので、村のなかでゾウを見かけることはあまりありませんでした。それにもかかわらず、村の人たちは熱心にゾウのことを語っている。これは何なんだろうと思い、それを知りたくてゾウの村に通うようになりました。

その後、大学に入ってから文化人類学という学問に出会いました。文化人類学では、フィールドワークにおいて現地の人びとと信頼関係を構築することや、現地の人びとの視座を学ぶことを重視しています。私も現地の人びとに寄り添うような関わり方がしたいと思っていたので、文化人類学に強く惹かれました。ゾウの村に通いながら文化人類学を学ぶようになったことで、ゾウの村での研究を始めました。

——「動物の権利」という部分はいかがでしょうか。

大石 ゾウの村に通い続けてわかったことの

たところに、動物倫理学に出会いました。ピーター・シンガーの『実践の倫理』という本を読んだのがきっかけで、それを通じて種差別という概念を知って、人間が人間以外の存在に対してどれほど抑圧的に振る舞っているかについて、問題意識を持ち始めました。

博士課程で研究を続けていた時は、動物倫理学は勉強するくらいで、基本的にはAI研究をしていこうと思っていました。ただ、AI倫理やロボット倫理などの論文を読むにつれ、だんだん人間以外の存在が道徳的にどう扱われるのかといった視点でAIと動物の双方を見るようになり、そこからAIと動物の倫理学を考えたいと思うようになりました。そういう成り行きで、人間以外の存在という枠組みから、脱人間中心主義をテーマに研究をするようになりました。

私は人間中心主義(anthropocentrism)には大きく分けて二つの意味があると思っています。ひとつは記述的な人間中心主義です。たとえば、人間を基準にして動物の生態や心理、行動を理解しようとする考え方です。擬人化もその一種かもしれません。人間を軸にして、さまざまなものを記述、説明、解釈、研究したりする、そういう記述的な人間中心主義というものがあるかと思います。

もうひとつが、私が問題意識を持って研究に取り組んでいることです。道徳的、あるいは規範的な人間中心主義というものです。道徳的な重要さでは人間が一番上について、その下に動物や他のさまざまな存在が従属している、と考える立場で、人間の特権視する

一つは、ゾウは良くも悪くも社会から注目されやすい存在だということです。タイ国内において、ゾウは文化や宗教、王室などにとって重要な「象徴的存在」とされています。一方、主に欧米の動物擁護団体や個人は、ゾウを保全や保護の対象である「野生動物」とみなしています。こうした人びとが、ゾウを見るために現地まで来ることがあります。その際に「ゾウを飼育していること自体がゾウに対する虐待である」として、時には暴力的な手段を用いて現地の人びとを非難する様子を私は目の当たりにしてきました。それに対して、クアイのゾウ使いたちは「ゾウは自分の家族である」という説明をするのですが、それは常に「言い訳」や「嘘」と捉えられてきました。

もちろん、動物擁護団体が依拠する「動物の権利」や「動物の福祉」といった概念は、動物が搾取されている状況を改善する上で重要であるということはわかるわけです。その一方で、搾取や虐待があるということを前提としてゾウ使いとゾウを見てしまうと、表面的にはどうしても搾取や虐待のある関係に見えてしまう。けれども、実際によく観察してみると、そこには搾取や虐待とは言えないような関係があるわけです。虐待どころかその関係はとても親密で、ゾウ使いもゾウもお互いを信頼しながら暮らしている。そういった状況をどう捉えたらいいのかと考えた時に、そもそも「動物の権利」とは何なのかというこ

ものです。もちろん両方とも独自の問題を抱えているとは思いますが、倫理学として問い直したいのは、やはり道徳的な意味での人間中心主義のほうです。人間が道徳的に特別だというような考え方を、どうやって批判的に問い直していけるかというところに関心があります。

人間と人間以外を区別し、階層的に捉えて優劣をつける種差別は、まさにそうした規範的な人間中心主義の一つで、これを批判するのが動物倫理学だと思っています。今後はAIもこの階層の中で従属側に位置づけられてくるかもしれない。AIがもし道徳的配慮の対象になりうるのだとしたら、AIを人間よりも劣った存在として位置付けるのでなくて、この階層自体をどうやって崩すのが重要だと思います。そのため、こうした階層をどう批判的に見るかというところに、私はずっと問題意識を持って研究をしています。たとえば人種差別や性差別は今なお多く残っています。が、こうした差別はいずれも、ある種の優劣をつけるということだと思っています。私は、そうした階層をなくし、平等にしていこうことを目指して研究しています。

大石 人間中心主義という概念とともに、人間例外主義(human exceptionalism)という概念もあります。文化人類学や近接する領域では、人間をさまざまな生き物の上に立つ例外的な存在とみなすキリスト教的な思想に基づく立場をそう呼んでおり、人間中心主義とは区別されています。人間中心主義が何を指すのかは、分野や文脈によって捉え方が異なる



●大石友子(おおishi・ともこ)
2024年度 50周年記念助成「多元世界における動物の権利に関する人類学的研究」代表者

とをもう一度問い直していかなければ、私たちは偏見を振りかざして自分がよく知らないものを自分の先入観で判断してしまう。そして、それがある種の「暴力」として立ち現れ、現地のゾウ使いだけではなくゾウにも被害をもたらす。そういった現状があるということをもつて感じてきたことから、これまで行ってきた人間と動物の関係についての文化人類学的な研究の延長として、「動物の権利」について考え始めました。

——竹下さんに伺います。竹下さんは今回のプロジェクトで人間中心主義を問い直すというテーマを掲げられていますが、なぜ人間中心主義が気になったのか、そしてなぜそれをAI研究の方まで広げていくことになったのかを教えてください。

竹下 私は学部の際は工学部で、院生時代は情報科学研究院に属していたので、AIを技術的に研究したいと思っていました。ちょうどAIが注目され始め、自分でも勉強を始め

ります。ですが、問題とされるのは、人間を主体、それ以外の存在を客体とみなし、人間の視座を正しい見方として想定することかと思っています。ここでいう「人間」には誰が含まれているのか、そして誰が「人間」以外の存在とみなされるのか、そこが人間例外主義にもつながる問題です。

文化人類学においても人間中心主義批判は行われてきましたが、近年はその見直しも生じています。なぜかという点、人間を中心として見ることは、実は私たちが日常的に行っていることでもあり、人間の身体を持つ以上は逃れることができないものだからです。しかし、ここでの「人間」とは、人間中心主義批判において指摘されてきた、キリスト教に依拠した「白人男性」を基準とした「人間」や、「人間」以外の存在とされる人びとや動物などを客体化して支配する欧米的な「人間」のことではありません。たとえばアイヌの人びとにとつての「人間」とは、和人のことではなく、アイヌ自身のことであることが知られています。ゾウの村に暮らすクアイの人びとの自称である「クアイ(Kuay)」もまた、「人間」を意味します。彼らにとつて「人間」とは、多様な存在との関係のなかで生きる彼ら自身のことであり、それは普遍性が想定される概念ではないのです。このように、世界中には多数の「人間」概念があります。その「人間」概念を基準として、それぞれの身体から世界を見ることは、ある意味で世界中の人びとにとって避けられないことでしょう。

同時に、動物もまた、それぞれが身体を持つ

た主体としての誰かであり、その視座から世界を見ている。それを否定して、神のような位置から客観的に世界を見ることはできないのではないかという議論が、近年の文化人類学ではなされています。その辺りは倫理学でも検討されていたりしますか。

竹下 少なくとも私が研究している倫理学は欧米で発展してきたもので、理性的な主体としての人間というものが前提になっていることが多いと思います。そして、おそらく、そこに白人男性がモデルとして想定されている部分があったのはその通りだと思います。ただ、動物倫理学もフェミニズムとの接続を図ってきた歴史があり、生命倫理や環境倫理など、他のいろんな分野の倫理学との接続を図りながら、そもそも動物とは何なのかとか、人間とは何なのかということも考え直してきた部分は間違いなくあると思います。

人間中心主義という言葉が使われるとき、「人間」という語はすでに規範的な意味を帯びていて、誰が人間に含まれるのが先に決められているように感じます。ですから、「人間」の概念はひとつではないという文化人類学の指摘は、その通りだと思います。そもそも人間とは何なのかということを問い直していけたらいいというのは常々思っています。

AIは最近すごく発展してきていて、いくつかの課題では人間の成績を上回ったと言われています。ただ、そこでもやはり「人間とは知的な存在である」ということが前提にされているように感じていて、私はその点でAI研究に対してモヤモヤするところが結構あ

ります。一方で、人間じゃないとされるAIが、人間を超えるという形で人間概念を問い直す契機にもなってくれるんじゃないかなと思っています。そういう意味でAI研究は、人間中心主義に対して全く別の角度から批判的に見ることもできるものなのでは、と感じています。

本当はそれを動物倫理でやりたかったんですが、あまりに、動物は人間的ではない、とされ、さらに人間より劣っているものとして強く位置づけられてきたので、動物の側から人間観を批判的に問い直す、見方や考え方を揺るがすのはものすごく難しいと感じています。AI倫理からも入っていくことで、人間についての規範的な見方を問い直せたら面白いのではと考えています。

共通性と差異の対話の中で考える

大石 私と竹下さんは50周年記念助成の贈呈式ではじめて出会ったわけですが、最近、動物と倫理に関する分野横断的な研究会と一緒に立ち上げました。そこでは、メンバーが専門とする倫理学や文化人類学、法学、文学とはそもそもどういう学問なのか、というところから対話を始めました。また、私たちは異なる分野を専門としつつも、動物に関連する研究を行っているという部分でつながっているのも、それにまつわる困難についても一緒に考えようとしています。たとえば、それぞれの学問において動物について考えることは、どのような障壁があるのか。加えてメン

を実験的な場所として捉えています。

大石 ワークショップは、どうしても参加者が複雑な現実のなかに留まりにくく、安易な回答に落ち着きがちなところが難しさだと思います。ですが、私自身は現実の難しさのなかに留まることがとても重要だと思っています。研究にしても、現実の複雑さを看過しないよう注意を払うことで、現場の人びとの実践にもコミットできる可能性を高めることができるはずです。私が竹下さんと話している楽しいのは、一緒に現実の難しさに留まってくれるからです。難しくて簡単には答えが出ないことを考えることに、根気よく付き合ってくださいるので、そこが好きなところですよ。

——複雑なものを複雑なままにしておけるということは、今の世の中に欠けがちなと思うので、すごく重要なことだなと思います。参加している人にそういう場を提供する機会になりますよね。竹下さんは取り上げるテーマは何でもいいとおっしゃいましたが、日本の

市民と一緒に考えるにあたって、動物の種類が変わると答えが変わることはありえるのでしょうか。

大石 ありえると思います。フランスの哲学者ジャック・デリダは、動物が“animal”として単数形で捉えられていて、複数形の“animals”として捉えられていないということについて問題提起しています。つまり、動物とされる多

バーの中にはアクティビストとして活動している人もいるので、動物解放やヴィーガニズムに関する議論や主張をしたときに、他の研究者や学会からどう捉えられるのかなどを、まずは共有してみることになりました。

人間を中心に置いている学問の多くでは、動物を取り扱うこと自体に難しさがあります。そうした学問において、動物がどのような存在として捉えられてきたかという、人間より劣る存在、もしくは取るに足りない存在と捉えられてきたといえます。たとえば文化人類学においては、「資源」として人間に利用される存在や、「象徴」として人間に意味を付与される存在として捉えられており、動物が人間とともに生きる存在として捉えられるようになったのは比較的最近のことです。その難しさそのものを、私たちは研究会を通じて考えようとしています。

——竹下さんが関わっている「動物倫理かいぎ」について少し説明していただけますか。

竹下 「動物倫理かいぎ」というのは2024年12月頃に立ち上げた学会のような学術組織です。ただ、学術研究者しか来ないいわゆる「学会」にはしたくなくて、できる限り、アクティビストの人はもちろん、研究やアクティビズムに積極的に参加してはいないけど動物倫理に関心を持っているような人たちも集まれる場所にしたいというのは、立ち上げメンバー全員が最初から考えていたことです。

たとえば、この研究大会で2026年1月に取り上げたのはクマに関する問題です。昨今クマに関しての問題がとても話題になって

様々な生物種のなかの差異に注目する必要があるんじゃないかと言っているんですね。動物といってもそこには多様なものたちがいて、もちろん共通性もあるものの、差異のある身体を持ち、それぞれ別様の関係を築いて生きている。それは重要な指摘だと私は思っています。哲学においてはデリダ以外でもそういった議論が展開されているのではないのでしょうか？

竹下 たとえばスー・ドナルドソンとウィル・キムリックの『人と動物の政治共同体(原題：Zoopolis)』という本では、動物も私たちの政治共同体の中に含めて考える、かなりラディカルな議論をしています。この本は、動物を人間との関係によって三つに分けます。

一つ目は、イヌやネコ、ウシやブタのように家畜化され、人間と密接に暮らしている動物で、かれらには市民権を認めます。二つ目は、ネズミやカラスなど、人間と生活圏をある程度は共有しているけれども、家畜化されていないか、されていたとしても人間との関係がそこまで密接ではないような存在です。かれらにはデニズンシップ(Denizenship)というものを認めます。これは、人間でいうと、国籍はないけれど長期間住んでいる人に対して、選挙権等の一部の権利は認めないものの、社会保障や定住の権利など、一定程度の権利を与えるというような中間的な地位のことです。三つ目は野生動物で、かれらの共同体を主権を持つ存在、「主権国家」として尊重し、私たちはそれに対して過度に介入しない。介入するとしても、たとえば災害で困っている



●竹下昌志(たけした・まさし)
2024年度 50周年記念助成「人間中心主義を超えて：動物・AI・サイボーグから考える未来の人間社会像」代表者

ときに助ける程度にとどめる。

ドナルドソンとキムリッカはこのように、人と動物の関係の距離に応じて政治が認める権利を変えようという提案をしているんです。動物倫理学の中ではこのような理論を関係的アプローチなどというのですが、そういう理論も検討しつつ、動物の差異を踏まえて考えることが、動物倫理学のひとつの大きな流れになってきたと感じます。

大石 共通性と差異、もしくは普遍性と多様性というのは、文化人類学において非常に重要な主題の一つです。なぜなら、文化人類学ではフィールドの事例について個別具体的な文脈を論じるとともに、それを抽象化して普遍性のある概念についても論じているからです。私が竹下さんと対話できるのは、そういう共通性だけでなく差異も捉えようとするスタンスをお持ちだからだと思います。けれども、学問としての哲学は、どちらかというと普遍性について考える傾向が強いように思います。

かつて文化人類学では、普遍性を重視したあまり、多様な文化の差異を進化論的に「進化」や「発展」の度合いの違いとして捉えてしまいました。それが結果的に、先住民を「未開の人びと」とみなす差別的な見方を広め、植民地主義に加担してしまったという反省があります。ここには、自分たちの文化を普遍的なものとし、自分の文化の価値観で相手の文化を一方的に評価する自文化中心主義が存在していたことが指摘されています。それゆえ、現代の文化人類学では共通性

とともに、人間の間、及び人間とそれ以外の存在の間にある差異を強調するようになっていきます。

竹下 共通性と差異、両方大事だというのは私もその通りだと思います。人間と人間以外の動物に差異があるのは当然で、その差異を認めながら、共通性と差異のどちらに軸足を置くかが、哲学と文化人類学の違いと言われれば、確かにそうだと思います。

私は大石さんがアクティビスト・マインドを持っているところがとても好きなんです。フィールドワークで記述するだけでなく、何が問題なのかを真剣に考えながら、それをどう変えていきたいかまで話してくれるところがとても素敵だなと思っています。倫理学者って、たしかに規範的なことを言うんですけど、具体的なアクティビズムの活動、団体や学会を立ち上げる、ワークショップをする、といったことまでやる倫理学者ってそんなに多いわけじゃないんですよ。あくまでも、我々がやっているのは哲学だ、という線引きがあつて、学説の検討に留まっている傾向があると感じます。

でも私自身はアクティビストとしても倫理学者としても活動したいと思っています。むしろ研究とアクティビズムがつながっていることが学問をするということだと思っています。哲学の中には研究と社会的な活動を切り離すイメージが根強く残っていますが、私はそれに抵抗したい。私自身は両者を結びつけて一緒に行うことこそが、学問をすることだと思っています。

ずあつて、そのために有効であれば自分自身も発信の道具として使うという感じです。最近はYouTubeやABEMAなど4つのメディアに出させてもらいました。

大石 そうしたメディア出演をされるなかで、誹謗中傷に近いコメントがつくこともあると竹下さんからは伺っています。それでも、竹下さんはメディア出演を利用することで、パフォーマンズとしてさまざまなことをやろうとしている。それは本当にすごいことだと思います。

じつは今日、竹下さんが何を着てくるのか楽しみにしていたんです。どのような服を着るのかもパフォーマンズのひとつだと思うので。一緒に写真を撮るかもしれないと思い、私は目立たない服を選んできました。

竹下 これ昨日買ったばかりなんですよ。友人と相談して、ヘアスタイルから洋服までトータルコーディネートしました。

大石 すごく可愛いですよね。とても似合ってます！

——ところで、AIのデータ処理にはたくさん電氣を使い、熱も発生し、大量の水が必要と言われています。そうするとお二人が研究して目指しているような良い世の中が遠くなるような気もするんですけど。環

大石 私は文化人類学と出会う前からゾウの村の人びととの付き合いがあつたので、彼らが直面させられている現実を変えたいという気持ちを強く持つてきました。そのためには、文化人類学者として論文を書くだけではなく、プラスアルファとして何かをやらなければならぬと思っています。それは究極には、自分の「正しさ」を振りかざすような態度や差別を容認するような態度を許してしまう社会を変えていくことだと思っています。なぜかという、ゾウの村の人びとの現実を変えるためには、ゾウの村の人びととゾウの向き合う現実だけではなく、多様な人びとと動物の向き合う現実についても考える必要があると思っています。

日本でも排外主義が高まるなかで、外国から来た労働者や、移民、在日の人びとなどに対する差別的な眼差しが広まっています。こうした「他者」とされる人びとに向けられる差別的な眼差しが、まわりにまわってゾウ使用したを理解せずに批判する差別的な眼差しにつながっていると思っています。また、こうした眼差しは、民族的なマイノリティに対してのみならず、私たちの日常生活の中にある男女の間で生起するさまざまな不均衡性であったり、性的少数者と呼ばれる人びとや障害者とされる人びとに対する差別ともつながっているの、何かしらの形で社会を変えていきたいという思いを持っています。

私と竹下さんは、動物に関する問題を単に動物だけの問題とは考えていなくて、フェミニズムなどの問題との関わりの中で考えてい

境が壊れていくわけだ……。

大石 それは私もずっと気になっていました。AIとヴィーガンは相容れないんじゃないかと思うところがあつて、竹下さんに伺ってみました。

また、ヴィーガンは脱動物搾取の運動ですが、ヴィーガンの暮らしと先住民の暮らしの相容れなさも感じるわけです。ヴィーガン食では肉の代替として大豆が使われることが多いです。現代における大豆の生産地は、歴史的に見れば入植者が先住民から奪った土地である場合もあります。つまり、大豆生産の背景には、先住民たちが土地や、動物、植物とのつながりを奪われている状況がある。かつ、AIは環境に負荷をかけるものであり、農業や動植物にも影響を与える可能性がある。そう考えたときに、AI、環境、ヴィーガンの間にある相容れなさはどうのように処理

「インサイダー・アウトサイダー」の視点からAIを見る

——竹下さんはいろんなメディアで発信されていますので、「竹下昌志」が今こういうことをして、こう考えています、というのを前面に出していかなるを得ない場合が多々あると思います。ご自分の研究を語るうえで、自分がこうあらねばならないという意識はありますか。

竹下 いや、ないですね。むしろ逆で、私という存在はあくまでもメディア発信のための単なる手段だと思っています。たとえばヴィーガンを続けていることも、もちろん動物のためというはあるんですけど、それと同時に、動物のために活動しているという姿を見せるためでもあります。ヴィーガンとして人前に出ることで伝わるものがある。さらに言えば、わざわざメディアに出るのも、私を持つているような問題関心をメディアに出して発信してくれる人がまだ少ないからです。

ヴィーガンやノンバイナリーといったマイノリティとしてメディアに出ることは大変なことなので、少ないのは仕方ないと思っています。私としては、目的として社会をなんとかしていい方に変えていきたいというのがま



2026年度プロジェクト一覧

2026年度に採択された国内助成プログラム12件、研究助成プログラム8件、国際助成プログラム9件のプロジェクト一覧です。

※掲載内容は2026年9月16日時点の情報です。各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

国内助成プログラム

1)日本における自治型社会の一層の推進に寄与するシステムの創出と人材の育成

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)
荒谷大輔	農村課題の解決に向けた贈与経済2.0—自治型社会の創出と人材育成	1,200
小林ななみ	自治を支える地域共助人材「関係案内人」の実装に向けた分析・検証・試行	800
山下賢太	鹿児島と沖縄の海域を資本とした離島文化経済圏の自治モデル	1,500
坪井あや	違いを前提にした対話により市民が「問い」を立てられる環境が自律して続く基盤づくり	1,400

2)地域における自治を推進するための基盤づくり

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
杉田真理子	旧小児科医院を活用した「生態的処方」によるケアの自治基盤づくり	600	京都府
水谷祐哉	医療機関がつくる「ふたつの公民館」を軸とした自治型社会の創出	565	三重県
吉村恵理子	廃炉・バックエンドを地域自治のテーマへ変換する対話と表現の基盤	600	福井県
森 一貴	多様な人々が、自ら「つくる」まちを実現する舞台としての「さばえまつり」と「鯖大」	480	福井県

されているのでしょうか？

竹下 私の中でもまだ答えが出ていません。AI研究と動物の権利の研究は独立して始めたもので、それを続けているというのが部分的にはあります。ただ、修士2年の頃に、AI研究と動物倫理研究をつなげたいと思うようになりました。そこで、私のAI研究の一つの大きなテーマとして、AIの中の種差別バイアスの研究を始めました。OpenAIやAnthropicなどのAI企業は、ジェンダーバイアスや人種バイアスには比較的注意を払っています。まだ多くのバイアスが残っていますが、露骨な差別的発言をさせないように制限をかけたり、バイアスを取り除くような技術的な取り組みをしています。このように、人間に対する良くない偏見を取り除こうという努力はされている。

ところが、動物に対する種差別バイアスを取り除く取り組みはほとんど行われていません。私の研究の一つは、そうしたAIの種差別バイアスを分析し、定量化して評価する。そして、できればそれを減らすことを目指しています。そういう意味では、私自身もAIを批判的に研究していると思います。

フェミニスト認識論などの分野において、「インサイダー・アウトサイダー」という言葉があります。文字通りに、内部にいる外部の人という意味です。内側に入って一緒に仕事はしているけれど、外部の者として扱われることがあり、内側の常識と外側の見方の両方を知ることになる。私はそういう立場でAI研究をしているつもりです。AI研究の内部

にいるけれど、持っている視点は、動物倫理学や活動家という外部の視点です。私自身、理系的な教育の中で育ってきたものの、他のいろんな文系の人たちとのつながりの中で自分の知識体系を築いているので、理系的な内部の視点と同時に人文的かつ活動家としての外部の視点も持っているという意味で、AI分野においてインサイダー・アウトサイダーの視点を持っていると思っています。

たとえば、学会の懇親会などは食事の場合なので、ヴィーガンであることは隠しようがないのですが、それによつて、AIの種差別バイアスの話を聞いてもらう前に、感情的だとか、活動家だからバイアスがある、と見られることがあります。AI研究で当たり前とされていることと、動物倫理で当たり前とされていることがずれているから、内部にいると見えない前提が見えてくる。インサイダー・アウトサイダーの議論では、こうした視点が分野に新しい視点をもたらすと言われているので、その概念を知った時にすごくしっくりくるなど感じたので、その方向性で頑張っているなと思います。

大石 文化人類学では、中立で客観的な立場というのはいずれ、誰が何を研究しているのかは重要なことです。文化人類学者はフィールドワークで人びとが行っていることに参与するので、フィールドの現実それ自体が調査者である「私」がいるから生起するものであり、その現実が「私」の身体の位置からしか見ることができません。それゆえに、分析も記述も、身体を持ち、立場性を伴う「私

からは切り離すことができないんです。竹下さんの研究もそうした一面があり、竹下さんだからその立場性や発想が研究に独自性や意義を生み出しているといえるのではないでしょう。

竹下 哲学では、重要なのは語られている内容であつて、誰が語っているかではない、と言われることがあります。でも、意外なことに、哲学の方が科学よりも誰が言ったかを重視する面があります。たとえば、カントとかヘーゲルみたいな著名な哲学者の名前にはかなりの重みがあるように感じます。「カントがこう言っている」ということが重視されている感じがあつて、意外と誰が言っているのかを気にしている。哲学研究をしていて意外だったのは、このギャップです。でも、私が哲学に惹かれたところは、建前として語られる当事者性のなさ、つまり誰が語るかに左右されないことのほうです。語っている内容が重要で、当事者が言っているのか当事者じゃない人が言っているのかによって内容の評価は変わらないとされているところこそが、哲学の魅力だと思っています。とはいえ、当事者であることで説得力が増すということもよくわかっていますが……。

——— そのように思い悩んでいらつしやるところがいいんじゃないでしょうか。先ほど大石さんがおっしゃったように、無理にどちらかに決めず、ずっと迷ったまま留まっていられる状態というのは、ある意味すごくいいのかもしれないですね。それはまた、考え続けていく原動力にもなるのではないのでしょうか。

※本対談はこのあとヴィーガンレストランに移動し、さらなる話題へと発展していきました。誌面の都合上、本誌では掲載しきれなかった後編は当財団ウェブサイトにて掲載しています。ぜひ、ご覧ください。

2026年度プロジェクト一覧

国際助成プログラム

代表者氏名	題 目	助成金額 (万円)	主な活動地域
金 圓景	日韓協働による多様な認知症当事者の主体的な社会参画モデル構築 —— アジア発の新しい共生モデルの提示 ——	950	日本、韓国
永井陽右	インドネシア・フィリピンにおける非国家武装組織に関わった若者の 社会復帰に関する実践知の相互学習と包括的なモデルの構築	850	インドネシア、 フィリピン
ツアオ ブ クイエン アン	ベトナム・フィリピン沿岸の実務者交流による気候適応力の強化	850	ベトナム、フィリピン
黄 春源	アジア太平洋地域における総合災害対応訓練・交流プロジェクト	900	台湾、フィリピン、 バングラデシュ、 スリランカ
廣田智也	こども・若者のウェルビーイングを目指す日韓協働プロジェクト：若者 文化の視点を取り入れた自殺予防と実践指針の共創	950	日本、韓国
利根川裕太	Project AILIC：相互視察と対話による実践的AIリテラシー教育モデルの 国際共同開発	950	タイ、インドネシア、 バングラデシュ
大塚健司	メコン流域の越境的・複合的リスクへの対応に向けたデータコモンズの 構築とリスクコミュニケーションの改善	800	タイ、ベトナム
後藤弘子	親が受刑者である子どもたちの可視化に向けた日韓台相互学習プロジェクト	950	日本、韓国、台湾
野川未央	平和のための水を植える —— 水資源の保全・回復を起点に東西ティ モールと沖縄の若者が共に考える「豊かな未来」への道筋	800	日本、インドネシア、 東ティモール

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
村川友美	恵みとリスクのマネジメントを目指したランドスクリプトベースの流域自治プロジェクト	600	宮崎県
矢口真紀	小商いから『福祉がにじみ出るまち』へ ー小商いから自治への実装モデルー	600	埼玉県
井上恵子	「えんキッチン」 ーつくる・食べるを通した小さな関係づくりー	575	東京都
高野雄太	商店街を起点とした地域自治の「OS」のアップデートーハッピーロード尾山台での実践	600	東京都

研究助成プログラム

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)
新井康之	「生きた葉」と社会の対話 —— 価値・物語・データの三重のつながりを編むアジア共創プラット フォーム	760
垣本由布	孤立死から紡ぐ地域共生 —— 法医学・検視データが拓く穏やかな看取り社会	740
進藤由紀	子ども・若者支援の「点」を「面」へと転換する地域コモンズの構築と展開 —— 実践者と研究者 の協働による地域社会の設計図策定	740
高橋 史	つながりが支える子どものメンタルヘルス —— 専門知と実践知が循環するオープンソース型教育 システムの構築	740
高嶋由布子	ろう・難聴児とその家族のつながりを支える —— デフメンター支援システムの構築と検証	760
河口真衣	「ケアとともに学び、はたらき、生きる」をデザインする —— ケアフル・ユニバーシティモデル 構築	760
一方井祐子	研究者主導から地域協働へ —— 長期継続型シチズンサイエンス「雷雲プロジェクト」の実践研究	760
内山瑛美子	共揺れの可視化による家族レジリエンス獲得・向上支援法の提案と検証	740

私たちの取り組み

助成対象者からの寄稿

今号は国内助成プログラムから奥田裕之さん、特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」から弓野綾さん、特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」から本嶋孔太郎さんにご寄稿いただきました。



2024年度国内助成プログラム
「助成題目」公益財団法人とネットワーク組織によるアセットの公益活用と市民自治モデルの形成

お寺とNPOがつくる、新しい「コモンズ」 ——市民が地域の土地や建物などを管理する試み

●奥田裕之（公益財団法人リタ市民アセット財団副理事長）

お寺と市民活動の35年間

私たちのプロジェクトでは、市民団体によるネットワークが公益財団法人を設立し、土地や建物（以下、アセット）を市民自身で公益活動のために管理・運営する試みを進めています。

きっかけは、35年前に東京都江戸川区の寺院「寿光院」の大河内秀人住職が、お寺の所有する場所の一面をNPOの活動場所に提供したことでした。

市民活動にも参加していた大河内住職は、その場所を市民活動が育っていくファーム（農場）となるよう「小松川市民ファーム」と名付けました。小松川市民ファームは、その後も長く市民団体の共同事務所として活用さ



松江の家

課後デイサービス、市民による太陽光発電、環境保全事業など、さまざまな分野で活用されています。

また「松江の家」と名付けられた古い一軒家

は、複数の団体による地域活動の拠点となっています。そこはオフグリッド（太陽光発電と蓄電池による電気の自給自足に改造され、コミュニティづくり、不登校児の支援、冒険遊び場、フードバンクなどの活動が展開されています）。

江戸川NGO大学による、市民団体のつながり

このように分野を超えた多くの団体が集うなかで、互いに活動内容を学び合おうという動きが出てきました。

「江戸川NGO大学」と名付けられたその会の第1回テーマは、『50周年を迎える世界人権宣言』でした。私たちの活動における人権、平和、市民活動という基本的な価値観はここで共有され、現在までつながっています。

江戸川NGO大学は10年以上継続して2010年に終了しましたが、その蓄積は「江戸川子どもおんぶず」と「NPO法人足元から地球温暖化を考える市民ネットえどがわ」の共催による、『子どもの権利×気候変動プロジェクト』などに現在も生かされています。

お寺がNPOなどの市民活動へアセットを提供したことから始まった動きは、誰も意図しないうちにいつの間にか市民による有機的な公共空間を形づくっていました。

ただ、この状況はお寺の存在が前提となっています。大河内住職も、自身が元氣であるうちは大丈夫であっても、将来にわたってお寺がアセットを提供し続けることは困難だろうと考えていました。

そのため現状を持続可能とするためのチームを2022年に形成し、これまでの蓄積を検証しました。その中で、偶発的とも言えるこの全体を「コモンズ」と再定義し、財団法人を使ってお寺との契約関係を明確にして、活動の正当性と継続性を担保する計画をつくりました。それを受けて2024年初頭には、

一般財団法人を設立するための委員会が形成されています。

そして2024年10月にスタートした当プロジェクトでは、2025年度に改正された新制度のもとでの公益財団法人の設立、関係してきた市民団体等のネットワークによる運営体制の確立、長年の蓄積をコモンズとして再構築する試みなどの支援を行ってきました。

公益財団法人リタ市民アセット財団の設立

2024年11月には、多くの方のご支援で一般財団法人リタ市民アセット財団が設立され、内閣府との折衝の結果、2026年1月に公益財団法人となることができました。現在は関係している多くの団体が財団の活動にさまざまな形で参加できるような、新しい組織の在り方を模索しています。

リタ市民アセット財団は、まず3つの事業を進めながら、これまでに培ってきた蓄積とネットワークを次の世代へつなぎたいと考えています。

①公益を創っていくために、土地・建物を管理する事業

委託管理契約、サブリース契約、信託契約などを活用して、アセットを社会のために活用したいと考える団体や個人と一緒に公益を創る。

②空き家や土地、財産などを、税優遇の制度を使って寄贈いただく事業

公益法人の持つ税優遇制度を活用して、財団へのアセットや資産の寄贈や遺贈を呼びかけ、それを市民団体へ提供する。

③NGO大学などを通して、市民が主体となる公益を考えていく事業

市民と専門家が開かれた場で学び合うNGO大学を再開するなどして、より多くの人たちとともに市民による公益を考える。

公益財団法人でつくりたい、新しい社会の仕組み

トヨタ財団のご支援で、私たちは「公益財団法人による新しい仕組みづくり」のストーリーラインとなる当初目標を、ほぼ達成することができました。そして次に挑むべきテーマも見えてきました。

現代社会の課題の一つは、本来は社会全体の共有資産であるべきもののさえ、投資の対象や、限られた人や団体の所有物になっていることではないでしょうか。それに対して、地域の空き家、土地、資産のわずかでも、リタ市民アセット財団が所有、また志ある方からの管理委託を受け、それらを地域の共有財産とすることで、少し大ききかもしれません。新自由主義による弊害の一部を市民自身が解決する、「コモンズの仕組み」が生み出せないかと考えています。

私たちは、理想を求めるアマチュアリズムと実際の事業を行うリアリティという2面性を持っていますが、後者についてはまだまだ不十分です。

この助成事業は2026年10月で終了となります。見えてきた課題への対応には多くの団体や専門家、個人のご助力が必要です。引き続きどうか注目いただき、今後とも皆さまのご支援を賜れますと幸いです。



リタ市民アセット財団 役員

「外国人」と「医療」の間に、確かな入口をつくる

●弓野 綾（横浜市寿町健康福祉交流センター診療所／東京大学大学院医学系研究科医学教育国際協力学部門）



外国人と医療をつなぐ「入口づくり」

以前、私が勤務する診療所に、遠方に住む外国人の患者さんが、日本語を話せる友人に付き添われてやってきました。本人は日本語も英語も十分には話せず、診療所には医療通訳も医療ソーシャルワーカーもいません。診察の結果、治療が必要な病気が見つかりました。しかし、その病気があると働けなくなり、収入や在留資格にも影響するかもしれないといひます。付き添ってきた友人も、そこまでの支援はできません。私は患者さんの地元病院に紹介状を書きましたが、「この人は本当に次の病院にたどり着けるだろうか。その後の治療や生活を誰が支えるのだろうか」と不安が残りました。

私は総合診療医として外国人の患者さんを診療する中で、医療を必要とする外国人と、外国人に医療を届けたい医療者が、うまく出会えていないと感じてきました。そして、その間で両者をつなぐと奔走している

人たちがいます。

私たちは、外国人相談窓口や国際交流協会、NPOなどで、受診先探しや予約、通訳の手配、医療制度の説明、生活上の相談などを通じて外国人を支える人々たちを、このプロジェクトでは広く「支援者」と考えています。支援者からも、「診てもらえる医療機関が見つからない」「何軒も電話をかけなければならぬ」といった困難を聞きます。

外国人の側には、言葉や制度の壁があります。どの医療機関に行けばよいかわからない。電話をしても日本語で説明できない。一方、医療機関にも、「言葉が通じるだろうか」「診療に時間がかかるのではないか」「通訳や、医療以外の問題は誰に相談すればよいのか」という不安があります。

外国人に「もつと日本の医療制度を理解して」、医療者に「もつと頑張つて受け入れて」、支援者に「何とか調整して受診先を探して」と求め続けるだけでは、この問題は解決しません。それなら、三者が無理なくつながれる

ライン診療という「入口」を、人と人とのネットワークで支えます。

このプロジェクトには、これまで外国人の健康や医療アクセスに取り組んできた「みんなの外国人ネットワーク(MINZA)」、「Findadoc.jp」、「ともに創る外国人のケアネットワーク(MICaZ)」、日本プライマリ・ケア連合学会の外国人診療向上ワーキンググループなどのメンバーが参加しています。それぞれが持つ外国人当事者とのつながり、多言語情報、IT技術、医療、支援、教育、研究の力を持ち寄っています。

一人でできることには限界がある

プロジェクトは始まったばかりですが、多言語の予約・問診システムの開発、オンライン診療の実装準備、全国の医療者・支援者をつなぐネットワークづくりを進めています。私が大切にしたいのは、誰か一人の「善意」や「頑張り」に依存しないことです。目の前に困っている人がいれば何とかしたいと思う人たちは、すでに各地にいます。しかし、一人の医療者、一人の支援者だけでできることには限界があります。外国人当事者も含め、それぞれが持つ知識や技術、つながりを持ち寄り、仕組みとして支えられるようにしたいと考えています。

今後はオンライン診療を実際に運用しながら、患者さんが必要な医療につながれるのか、外国人、支援者、医療者それぞれの負担を減らせるのかを検証し、仕組みを改善します。さらに持続可能な運営基盤をつくり、将



オンライン診療と多職種連携で、外国人と医療をつなぎ続ける

確かな医療の「入口」をつくれなにか。そこから始まったのが、2026年5月にスタートしたこのプロジェクトです。

プロジェクトの2つの柱

取り組みには二つの柱があります。

一つ目は、全国どこからでも利用できる「オンライン多言語診療」です。スマートフォンなどから、多言語での予約・問診、保険証の確認、医療通訳を伴う診察、支払い、必要に応じた紹介状の作成までを一つにつなぎます。

オンラインですべてを完結させることが目的ではありません。対面での検査や治療が

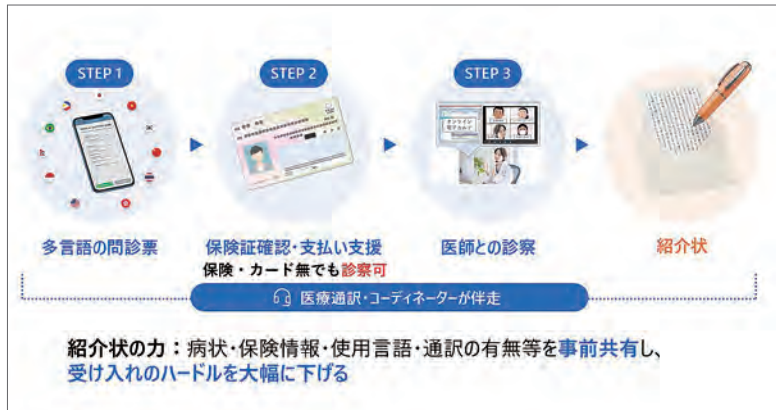


全国にひろがる多職種ネットワーク

来的には無保険や経済的な事情で受診が難しい人のための支払い免除診療枠を設けることも目指しています。

外国人も、支援する人も、医療者も、外国人診療で困ったときに相談できる人がいて、必要な医療や支援へ次につながっていける。そんな仕組みを全国に少しずつ広げていきたいと考えています。

国籍や言葉、住んでいる場所、お金の有無にかかわらず、誰もが必要ときに必要な医療につながれること。それは外国人だけでなく、さまざまな背景を持つ人が安心して暮らせる社会につながると考えています。



オンライン多言語診療で、確実な「入口」をつくる



「決めなくても前に進む」仕組みをつくる ——地域とルールづくりを変えるDAOの実践——

●本嶋孔太郎（弁護士／RULEMAKERS DAO／日本DAO協会）

現場で見てきた三つの気づき

私は学生時代に文化人類学を学びながらモンゴルや東南アジアの村を歩き、弁護士になつてからは規制改革や地域のプロジェクトに関わってきました。その中で見てきた構図があります。

一つ目は、本当に価値のあるもの、その土地の豊かさを支えているものが、大きな市場でお金にならないというだけで評価されず、続けられなくなっていること。二つ目は、それは放っておかれるのではなく、市場や開発とつながることで壊されていくこと。助け合いで回っていた地域が、都市に安いものを供給する場所へ変えられていくのを何度も見ました。三つ目は、「地域の課題」「途上国の課題」と呼ばれるものの多くが、その土地の人の問題ではなく、外の要因や制度、仕組みの側に原因があることです。

それなら制度を変えればよい、と規制改革の現場に入ると、そこにも同じ構造がありま

した。法律や政策は、陳情や選挙の日程に合わせて場当たりに積み重なり、一つの対症療法が次の問題を生む。関係者みんなで全体像を話し合う場がないのです。「全体の仕組みを考えない法律が、本当にあつていいのか」。これが、トヨタ財団に助成いただいた研究「マルチステークホルダーを有する課題解決・法制度設計の意思決定における、ブロックチェーン・DAO等の有用性と妥当性等の検証」の出発点です。

法律からではなく、「回る仕組み」から考える

研究を通じて確立したのは、順番を逆にすることでした。条文からではなく、まず一つのテーマに関わる人たちを集め、昔うまく回っていた仕組みや他地域の事例を参考に、お互いに得になる点を探し、テクノロジも組み込んだ「理想的に回る仕組み」を描いて合意する。そのうえで、理想と現実のずれこそ変えるべき制度と位置づけ、優先順位をつけて一つずつ実行する。この進め方

結果として全体の目的にもつながるように設計され、情報は参加者に見えていて、出入りも自由。大きな市場で評価されなくても、その価値を分かる人たちが集まれば、回る形はつくれます。

その骨格になるのが、ハレとケの循環です。祭りやイベントという「ハレ」の場が、外の人に関わるきっかけと動機をつくる。日常の「ケ」では、その人たちが地域の中で価値を創り、提供する側に回る。ハレで出会い、ケで一緒に手を動かすうちに関係性が育ち、地域を象徴する人や産品が生まれてくる。この循環を回し続けることが、価値を生み続けることになります。

そして、ケの中で価値をやり取りする道具が、円とは交換できない独自のポイント（トークン）です。規格外の野菜、宿の空き部屋、余った食材、手伝いの時間。市場では値のつかないものを、仲間内の物々交換のように融通し合うための共通の物差しになります。

香川県琴平町のDAOはデジタル住民のうち9割は町外の人で、竹あかりや琴平山博覧会のような祭りや展覧会の制作と開催がハレ



香川県琴平町のDAO

の場になる。こういったお祭りの手伝いにボランティアで参加すると、地元バス会社の高速バスの空席に乗れるといった形で、余っているものと手伝いの時間がポイントを紹介して交換されています。そしてこれをきっかけにして、Vuberが琴平町に関わるようになって、新たに支社が立てられたり、新しい事業が始まったり。

最初と最後だけ決め、途中は任せる

では、その中でどう決め、どう進めるか。研究の結論は、よい合意形成とは「みんなで頻繁に決めること」ではなく、「みんなで決めることなく、小さな判断の積み重ねで前に進める状態をつくること」でした。これを「動的合意形成」と呼んでいます。

最初に、全員が合意できるいちばん大きなこと——何を大切に、価値をどう循環させ、外に何を約束するか——だけを決めます。途中は、一回ごとに全員で決め直したり投票したりしません。任せる人と引き受ける人を決め、それぞれが自分の役割の中で判断して進める。そして結果を見て、最初の合意と決める。そのものを直していく。全員で決めるのは最初と見直しのときだけで、現場では小さな提案と承認が絶え間なく回っています。

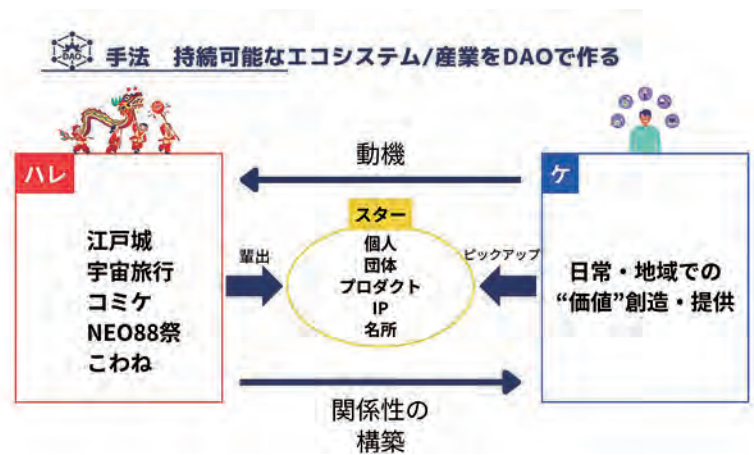
宮城県東松島市のKIBOTCHAでは、提案が出てまず投票せず、異論や別案が尽くしてから初めて投票に移るルールにしました。主役は投票ではなく、その手前の対話です。

小豆島のRe:Asset DAOでは、約100名のオーナーが集まって20万円ずつ資金を出

RULEMAKERS DAOは、デジタルノマドビザの創設や、DAOを合同会社として運営しやすくした2024年の金融庁府令（通称DAO法）の実現に、提言団体の一つとして関わりました。

DAOという器

描いた理想を、まず小さく実現する器がDAO（分散型自律組織）です。お金に限らない「自分たちにとつての価値」を真ん中に置き、あらかじめ決めたルールと役割に沿って、一人ひとりが自分の目的のために動く。それが



して古民家宿を改修・運営し、古民家宿の収益をオーナーに配当せず次の物件に再投資する「地域ファンド」の形をとり、全員で決めるのは価値の循環と外への約束だけ、どの物件をどう直すか・運営するかは専門性のあるチームに任せています。出資者は宿泊やポイントで還元を受けて島に通い、やがて広報や運営の側に回る。資産が増えるほど使える場が増え、関わる人が増えるほど価値が高まる好循環が生まれています。

実践と、実装のための道具

実践と教育の場として、東京都「TOKYO SUTEM」に採択され、起業家がルールづくりと事業を同時に進める伴走支援「OPEN BLUE」を運営しています。各地のDAOが自力で始められるよう、本助成の成果として、貢献の見える化やポイント付与を扱うアプリをLINEから使える形で公開し、日本DAO協会では「出資者も一緒に事業をやる」という考え方を反映したモデル定款やガイドラインを整えました。

社会課題そのものと、それを生む制度の問題、そして解決策を実行するときの難しさ。この三つを、回る仕組みから逆算し、DAOで形にし、動的合意形成で進めることで、まとめて引き受ける。それが私たちの試みですが、まだ試行錯誤の段階です。地域の使われていない資産を活かしたい方、コミュニティを活かしたい方、新しいルールをつくりたい方、ぜひご連絡ください。一緒に試し、直していく仲間を求めています。

Emily Szu-hua Chen

エミリー・チェン

東京大学未来ビジョン研究センター特任助教。専門は国際政治学。台湾・国立政治大学卒、スタンフォード大学修士課程修了、東京大学大学院博士課程修了。米シンクタンクでも政策研究に従事。国家が規範や価値を外交政策にいかに関与するかを研究し、現在は民主主義国によるAIガバナンスの国際協力とルール形成に取り組んでいる。

〈プロジェクト紹介と抱負〉

AIは、私たちの暮らしや社会を大きく変えつつあります。一方で、それを律する国際的なルールづくりは、まだ始まったばかりです。国や地域によって価値観や制度が異なるなか、AIという新しい技術にどう向き合い、共通のルールを築いていくのか。私は、この問いを国際政治学の視点から考えています。

これまで私は、日本の民主主義・人権外交を題材に、国家が規範や価値を外交政策にどう反映し、国際協力を築いていくのかを研究してきました。その中で実感したのは、価値観の異なる国々との協力が難しいことはもちろん、価値を共有する国々の間でも、協力は決して自明ではないということです。立場や優先順位が異なるからこそ、対話と調整を重ねながら協力を積み重ねていく必要があります。この問いは、AIガバナンスにも通じています。

AIガバナンスは、技術や法制度の問題として語られることが少なくありません。しかし私は、これを「多様な立場にある国々はいかに協力できるのか」という国際政治の課題として捉えています。欧州、米国、中国が異なるアプローチを示すなか、日本は「人間中心のAI」(human-centric AI)という理念を掲げ、多様な国々の橋渡しを試みてきました。私の研究では、日本を主な事例に、価値を共有する国々の協力はいかに形成され、それがより広い国際協力へどう発展するのかを明らかにしたいと考えています。研究にあたっては、政策文書の分析に加え、政策担当者や専門家へのインタビューを通じて、国際的なルールづくりの現場で何が起きているのかを多角的に探ります。

本研究を通じて、日本の経験から得られる知見を国内外へ発信し、AI時代にふさわしい国際協力のあり方を考える一助となることを目指しています。



新たに2名が着任しました！

トヨタ財団は東京大学未来ビジョン研究センター（EHC）と協働し、研究助成プログラムの新テーマ「つながりがデザインする未来の社会システム」のもと、社会システム変革に向けた研究に取り組む研究者を長期雇用し育成する協働事業プログラムを開始いたしました。2026年4月より東京大学未来ビジョン研究センター内にて研究活動をスタートされたお二人に、プロジェクトの紹介をお寄せいただきました。

協働事業プログラム「つながりがデザインする未来の社会システム」

トヨタ財団×東京大学未来ビジョン研究センター（EHC）



Huixin Wang 汪 慧心

東京大学未来ビジョン研究センター特任研究員。ランドスケープ計画を専門とし、国立公園や緑地が人々の行動・認知・ウェルビーイングにもたらす影響を研究。自然の恩恵が誰に、どのような条件で届くのかを明らかにし、より公平な自然利用と保全のあり方を探究している。

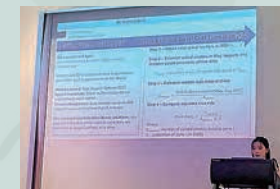
〈プロジェクト紹介と抱負〉

国際的な自然保護では、保護地域の面積だけでなく、その恩恵が誰に届くかも重視されるようになっていきます。昆明・モントリオール生物多様性枠組も、2030年目標に「持続可能な利用と利益配分を通じて人々のニーズを満たすこと」を掲げています。国立公園は、自然を守ると同時に、休養や学び、レクリエーションを通じて健康や自然への関心を支える公共資源です。しかし、その恩恵が社会全体に届くとは限りません。誰が利用でき、誰が取り残されているのかは、人々の福祉や地域社会の持続可能性にも関わる重要な課題です。

日本では、多くの国立公園が山地、半島、離島など交通の不便な地域にあり、人口減少や高齢化、地方公共交通の縮小も進んでいます。近くに国立公園があっても、車を使えなければ訪れにくい場合があります。また、私のこれまでの研究から、利用者が中高年層に偏り、若い世代の利用が少ない可能性も見えてきました。このままでは、自然体験の格差だけでなく、地域の活力や次世代の自然保護への関心も弱まるおそれがあります。

本プロジェクトでは、全国の市町村から国立公園までの移動のしやすさを、自動車と公共交通の両面から調べます。さらに全国調査を行い、実際に誰が利用しているのか、年齢、所得、交通手段、認知や関心など、何が利用を妨げているのかを明らかにします。行けるはずなのに利用されていない状況にも注目し、改善可能な障壁を特定します。

成果は、公共交通の接続、情報発信、入口施設や自然体験プログラムの改善など、限られた予算を必要な地域や人々へ届けるための基礎になります。私は、地図や統計だけでなく、管理者、自治体、地域住民、利用者の声と結び付け、現場で実行できる提案へつなげたいと考えています。自然を守ることと、誰もが自然の恩恵を受けられることを両立させ、国立公園を将来世代にも支えられる社会の基盤にすることが、私の目標です。



上：国立公園に関する研究成果を学会で発表する様子。下：日本の国立公園が提供する自然体験の一例。

日々の生活を送る中で、「あ！忘れていた！」と声を上げる瞬間は、多くの人が経験することでしょう。忘却に起因するミスを経験した後は、完璧な記憶能力があればいいのにと、ないものねだりをしてしまいます。漫画やアニメには、過去の出来事を映像のように覚え、瞬時に思い出せるキャラクターが登場しますが、現実にも、過去の出来事の多くを驚くほど詳しく思い出せる人たちが存在しています。その人たちは、HSAM (Highly Superior Autobiographical Memory) 、日本語では「非常に優れた自伝的記憶(者)」と呼ばれています。

HSAMの人々は、過去に経験した出来事を非常に鮮明かつ詳細に覚えており、「20年前の今日に起きた出来事は？」と聞かれたとしても、当時の出来事を詳しく思い出して答えられるそうです。苦勞なく自分の経験を覚えられることは、いろいろなことを忘れてしまう私たちからすると、理想的な能力に見えるかもしれませんが、すべての出来事を覚えておくことは、必ずしも幸福を意味しません。楽しい出来事だけでなく、つらい出来事も長く鮮明に残りうるからです。嫌な出来事がふと頭に浮かぶだけで、その日一日、ネガティブな気分が続いてしまうかもしれません。

このような視点に立つと、デメリットしかないと思われていた「忘却」にも、メリットがあることに気づきます。たとえば、引越越し前の住所をよく覚えているせいで、新しい

索誘導性忘却は、ある情報を思い出すことで、関連する別の情報が思い出しにくくなる現象です。たとえば、「リンゴ」「ミカン」「トンボ」を覚えた後に、「リンゴ」だけを繰り返し思い出してもらいます(図2)。その後、すべての覚えた単語を思い出してもらうと、「リンゴ」と関連しているものの、途中で思い出さなかった「ミカン」は、「リンゴ」や無関係な「トンボ」よりも思い出しにくくなります。指示忘却が意図的な忘却であるのに対して、探索誘導性忘却は、何かを思い出した結果として生じる非意図的な忘却だとみなされています。どちらも、必要な情報を取り出しやすくするために、不要な情報が忘れられるこのころの働きを示しています。

さらに、ネガティブな単語などのネガティブな記憶に対しても、こうした忘却現象が確認されています(e.g. Kobayashi & Tanno, 2015)。ここで紹介した2つの現象以外にも、他にもいくつかの方法で不要な記憶や嫌な記憶を思い出しにくくすることができると考えられています(図3)。

近年は、必要な情報を自分で覚えるのではなく、スマートフォンやパソコンに保存しておくことが一般的になっています。実は、このような情報の外部保存も、忘却につながる場合があります。たとえば、Sparrow et al. (2011)の実験では、参加者に「ダチョウの眼は脳より大きい」などのトリビアをコンピュータに入力してもらいました。その際、情報が保存されると伝えられた場合と、消去されると伝えられた場合を比較

「私」のまなざし 46

「忘れる」ことの利点

写真・文●小林正法
山形大学人文社会科学部



図1. 指示忘却の実験例と実験結果の例

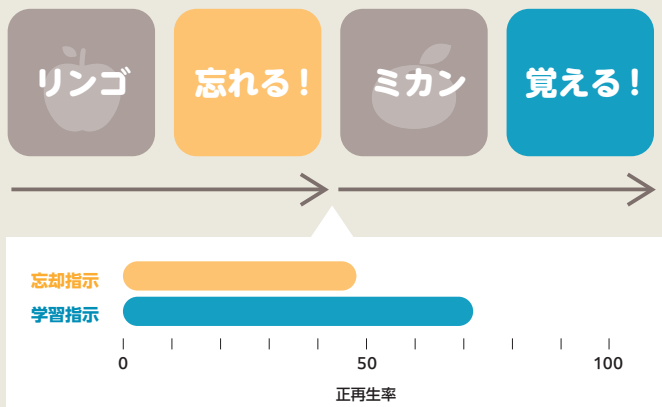


図2. 探索誘導性忘却の実験例



住所が思い出しにくくなることがあります。このような場合、不要な記憶を忘れることが、今必要な記憶を思い出す助けになります。忘却の利点は、三つあると考えられています(Norby, 2015)。一つ目は嫌な記憶を忘れること、二つ目は冗長な情報を忘れ、主要な点だけを覚えること、三つ目は状況に不適切な行動を忘れ、その状況に適した行動を選びやすくなることです。このように、「忘却」は私たちが持つ能力の一つだと捉えることができます。

これまでお読みいただいた方は、心のエラーにしか思えない忘却にも、プラスの面があることをご理解いただけたかと思います。しかし、「何かを忘れようとして、本当に忘れられるのだろうか？」と疑問を持つ方もいるでしょう。この疑問については、これまで多くの研究が行われています。代表的な研究の1つが指示忘却(Baden et al., 1993)です。

典型的な指示忘却の実験(図1)では、参加者に単語などを見てもらい、その後「覚えてください」または「忘れてください」と指示します。その後、覚えた単語を思い出してもらった、「忘れてください」と指示された単語の方が「覚えてください」と指示された単語よりも思い出しにくくなります。指示忘却の研究は、私たちが特定の情報がある程度、意図的に忘れられることを示しています。

他にも、探索誘導性忘却(Anderson et al., 1994)という現象も知られています。検

したところ、保存されると伝えられた場合の方が、トリビアの内容を思い出しにくくなりました。つまり、後で利用できると思える、その情報自体を覚えにくくなるのです。テクノロジーは、社会だけでなく、人のこころの働きも変えうるといふ点が非常に興味深いと思います。

本稿では、忘却とテクノロジーの関係について紹介してきました。ここまでは、テクノロジーが人間に与える影響を主に取りあげましたが、反対に、人間の記憶についての理解がテクノロジーの設計に活かされることもあります。たとえば、人間の忘却に似た仕組みを取り込むことで、機械学習の効率化を目指したExpire-Spanが知られています(Sukhbaatar et al., 2021)。人間のこころの働きとテクノロジーの関係は、多様な研究領域が扱うべき重要なテーマであり、今後の研究がより一層期待されます。



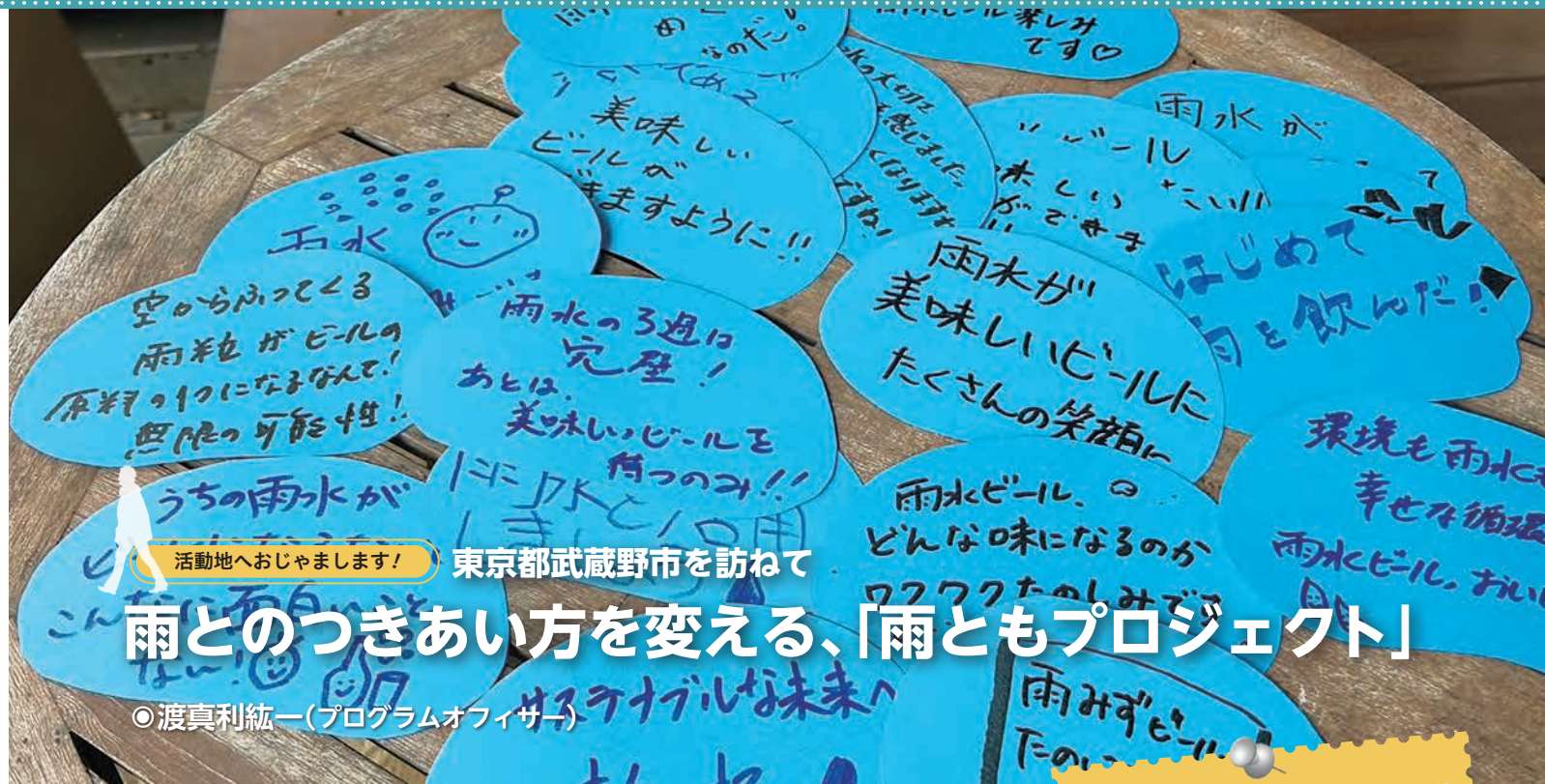
図3. 色々な記憶の制御テクニックを紹介した拙書『嫌な記憶を忘れる心理学』(西東社)

●小林正法(こばやし・まさのり)
2022年度特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」助成対象者。助成題目「テクノロジーの利用が認知機能に与える利益・不利益の解明」

引用文献

Anderson, M. C., Bjork, R. A., & Bjork, E. L. (1994). Remembering Can Cause Forgetting: Retrieval Dynamics in Long-Term Memory. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 20, 1063–1087.
Basden, B. H., Basden, D. R., & Gargano, G. J. (1993). Directed forgetting in implicit and explicit memory tests: A comparison of methods. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 19, 603–616.
Kobayashi, M., & Tanno, Y. (2015). Remembering episodic memories is not necessary for forgetting of negative words: Semantic retrieval can cause forgetting of negative words. *Psychonomic Bulletin & Review*, 22, 766–771.

Norby, S. (2015). Why Forget? On the Adaptive Value of Memory Loss. *Perspectives on Psychological Science: A Journal of the Association for Psychological Science*, 10, 551–578.
Sparrow, B., Liu, J., & Wegner, D. M. (2011). Google effects on memory: cognitive consequences of having information at our fingertips. *Science*, 333, 776–778.
Sukhbaatar, S., Ju, D., Poff, S., Szlam, A., Weston, J., & Fan, A. (2021). Not all memories are created equal: Learning to forget by expiring. *Proceedings of the 38th International Conference on Machine Learning*, PMLR, 139, 9902–9912.



東京都武蔵野市を訪ねて 雨とのつきあい方を変える、「雨ともプロジェクト」

◎渡真利紘一(プログラムオフィサー)

雨の雫型のメッセージ(提供：雨ともプロジェクト)

〔訪問地〕
東京都武蔵野市

〔プログラム〕
2025年度国内助成プログラム

〔助成題目〕
武蔵野市発・雨水からはじまる
地域の自治プロジェクト



雨みずビールが注がれたカップを、笑顔で受け取る参加者。

「まちに降る雨を、もっと活かせないだろうか？」
そんな問いを持ち寄り、試し、ときにやり方を変えながら一緒に
くる……。そうした実践を進めているプロジェクトがあります。
東京都武蔵野市で進む「雨ともプロジェクト」は、都市に降る雨を
「流すもの」から「地域をつなぐ資源」へと捉え直す試みです。このた
び、助成1年目の取り組みとして、「武蔵野の雨100%クラフトビー
ル」を製造し、完成を喜び合う現場に、2026年6月と8月に訪問
しました。

都市部の雨事情と市の対策

武蔵野市は、東京都の多摩地域東部に位置し、杉並区、練馬区、三
鷹市、小金井市、西東京市と隣接する人口約15万人の都市であり、都
心部からのアクセスも良く、住みやすい街として知られています。
都市では家が建ち並び、道路や下水道の整備も進められてきた一方
で、地表がアスファルトやコンクリートなどで覆われ、雨水が地面に
浸透しにくくなったため、降った雨水の多くが、一度に下水道や川に
流れてしまう状況があります。近年発生している局地的大雨の際に
は、急激に下水道管内や河川の水量が増えることで「都市型水害」と
呼ばれる住宅等への浸水被害の一因にもなっています。こうした近年
の都市型水害に備えるには、行政・企業・市民が協力して、雨を貯め
て活用したり、地中に浸透させることにより、下水道へ流入する前の
雨量を減らすことが鍵となるといわれています。

多様な人の想いに触れた「仕込みの日」

6月の梅雨の時期に実施された「仕込みの日」では、これまでプロ
ジェクトでつながった市民、大学研究室の大学院生、雨の活用に関
心のある水処理関連事業者など実に多様な参加者が2日間にわたり、
雨水の収集・ろ過・醸造工程を担いました。1日目は、雨水提供に手
を挙げた市民宅の雨水タンクと、市の環境啓発施設「むさしのエコレ
ゾート」のタンクから、計約330リットルの雨水を集水。私も集水
作業に参加させてもらいましたが、屋根から直接タンクに集まった雨
は不純物がほとんどなく、きれいで驚きました。



市民宅の雨水タンクから集水する様子。



集水した雨水をろ過する様子。

プロジェクトの協力先である
ビール醸造所(26Kブルワリー)
のテラスでは、連携先のメンバ
が開発した装置を用いて精密ろ
過し、煮沸殺菌が行われました。
2日目の煮沸後の雨水で麦汁を
つくり、ホップを投入。さらに酵
母を加えて発酵させる工程にも
市民が関わりました(別途、専門
機関で食品衛生法の26項目によ
る水質検査を実施し、基準適合を
確認)。

作業のほかに印象的だったの
は、雫型のカードに綴られたメッ
セージでした。そこには「はじ
めて雨を飲んだ」「うちの雨水が
ビールになるなんてこんなに面
白いことはない!」「雨みずビー
ル、どんな味になるのかワクワク
楽しみです」といった胸が高鳴る
想いが寄せられていました。こ
れらは雨水でビールをつくるこ

武蔵野市では、これまで浸水対策、雨水浸透による水環境の保全、
雨水の有効活用を進めるため、公有地への雨水貯留・浸透施設の設置
や民有地への雨水浸透施設等の設置助成等の取り組みを進めてきま
した。しかし、地下水のかん養や、浸水被害の軽減をより一層図るに
は、こうした取り組みに関与していない市民との「新たな雨との接点」
をつくる必要があります。こうしたなか、市民発で立ち上がったのが
「雨ともプロジェクト」です。

雨を貯め、測り、飲み、楽しむ

プロジェクトでは、雨を資源として捉え直し、雨を媒介に人が出会
い、学び、地域の未来を考える実践を推進するもので、活動は大きく
4つあります。

- 取組① 地産地消の雨水ドリンクをつくる
- 取組② 雨庭の実践
- 取組③ 雨水タンクや雨庭などのメリットの見える化
- 取組④ 雨を楽しむ場(学びの場、実践の場、交流の場)づくり

市民が主体となって取り組む背景には、武蔵野市が関東ローンを有
する武蔵野台地上に位置し、浸透条件に恵まれた地であることや、市
の面積の70%以上が宅地で、しかも庭付きの戸建て住宅が多いなど、
雨を貯めたり、地中に浸透させる対策に、市民一人ひとりの関わりに
よる効果大きいことも関係しています。

このプロジェクトの最大の特徴は、市民との「新たな雨との接点」
をつくるため、「楽しさ」と「創造性」を起点に学びや交流を深めながら
自治の基盤を育もうとするチャレンジにあります。雨水は「境界を持
たない資源」。そのため、行政区分や固定的な組織、世代を超えて人
が交わりやすく、多様な関わり方が可能です。

このプロジェクトで興味深いのは、こうした雨の特性を生かし、4
つの各取り組みが「入口」であり「つながり口」でもある／参加者はど
こからでも入れて、何度でも戻れる／各取り組みを回遊するうちに気
づきや共感、実践や制度連携などが積み重なっていき、生活の中で地
域への関わりや自治の意識が醸成されていく、といった明確なビジョ
ンがあることです。



研究助成×先端技術 合同合宿（中間報告会・ワークショップ）in 鳴子温泉

地方と都市の「つながり」から考える未来

2026年7月11～12日に研究助成プログラム「つながりがデザインする未来の社会システム」と特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」の合同合宿を開催しました。2024年の開催に続き、2回目の合宿です。助成対象者22名、有識者・財団関係者16名、計38名が宮城県大崎市鳴子温泉に集まりました。

- 当日の受付時にくじ引きで4つのグループに分かれ、グループ毎の席に座ってもらう
- 合宿冒頭に参加者全員でのアイスブレイクの時間を設け、仲良くなる時間を作る
- 助成プロジェクト1年目の方々はポスター発表形式とし、意見交換の機会を多く作る
- 助成プロジェクト2年目以降の方にはスライド発表でじっくり中間報告をしてもらう
- ワークショップとして、鳴子温泉地域のエクスカッションや、温泉宿のご主人の話を聞き、地域課題をグループごとに整理、「地方と都市の『つながり』から考える未来」についての研究プロジェクトを合宿の最後に提案してもらう
- ワークショップの発表については地域住民にも公開し、意見交換の時間を設ける
- 託児を設け、若手研究者の方々が参加しやすい環境を作る（初回も計画したものの、希望がなく今回初実施）

トヨタ財団では、気軽に人々が交流できるオンラインの活用を進める一方で、対面での交流や議論は、新たなアイデアやつながり、研究のヒントが得られやすいと考え、合宿形式での中間報告会を2年前に企画・実施しました。参加者から大変好評を得たため、2年に一度程度合宿形式の報告会を実施しようという運びとなり、今回、2度目の合宿を開催しました。

2回目ということで、1回目の内容をブラッシュアップして実施しました。前回との主な違いは次の通りです。



雨を両手で支えるポーズで撮影した集合写真撮影：小林 渡氏(AISA)

いった「楽しさ」と「創造性」が宿るプロセスに携わったからこそ生まれてくる言葉であると、かみしめました。

「気づいたら変わっていた」雨との付き合い方

8月の「雨とも乾杯！ 武蔵野の雨100%クラフトビール誕生祭」は、昼夜2部で約130人が集い、場は大いに賑わいました。もちろん、このイベントの狙いは雨みずビールを飲み交わすことではありません。雨をきっかけに、これまでの活動の歩みを皆で共有し、交流を深め、新たな出会いを生む。そして「雨と暮らし（気候変動、豪雨災害、雨庭、水循環等）」について考えるきっかけを社会へ投げかけることでした。

前半の〈成果報告〉では、プロジェクト代表の橋本さんから「豪雨が各地で起きる中、雨との付き合い方を考える会にしたい。「雨水の活用」と「各々の楽しみ」を掛け合わせ、楽しむことを大事にしながら関わってほしい」との呼びかけがあり、会場は温かい雰囲気になりました。

印象に残った話題として、プロジェクトの愛称「雨ともプロジェクト」を、約6か月の時間をかけて皆で決めたという報告がありました。こうした取り組みは一見すると

時間も手間もかかり後回しになりがちですが、他方で、誰もが関わりやすい対話と合意形成の貴重な機会であり、皆で自治の文化を育むよい体験になったのではないかと想像します。

続く「雨みずビールづくりリレートーク」では、作業の各工程に携わった10人以上のメンバーが、自身の言葉で雨やプロジェクトへの想いを語りました。普段、共有する機会が限られることの多い一人ひとりの想いを、こうした場で言葉にし、聴き合うことで、活動の意味を分かち合えたことは、今後の活動に向けてよい時間になったと感じました。

後半の〈乾杯・交流タイム〉は、各自が持参したマイカップに注がれた雨みずビールとともに味わいながら感想を交わす至福のひとつであり、皆さん、いい表情をされていました。会の終盤、自宅の雨水を提供した市民の方の「もともと強い関心はなかったのですが、雨がビールになると知って参加しました。今後は雨庭の活動にも関わりたいです」といった感想を聞きながら、このプロジェクトが目指すありようである、「気づいたら、雨との付き合い方が変わっていた」状態を体現する一人と出会うことができたのも、嬉しい瞬間でした。

市民の創造性と交流から広がる「流域自治」

誰もが日常の暮らしで関わっている「雨」。それは時に「厄介なもの」と捉えてしまいがちですが、実は私たちに「恵みをもたらしてくれるもの」であるということ。今回の訪問は善福寺川流域に暮らす私自身にとっても、雨との付き合い方が大きく変わるきっかけになりました。

国が推進する「流域治水プロジェクト」では、気候変動による水災害の激甚化に備えるため、自治体・企業・住民等が協働して流域全体で水害を防ぐ取り組みが進められています。こうした「流域治水」という大きな流れとも連動しながら、地域の環境や生活に身近な「雨水」を軸に、「楽しさ・創造性」から始まる武蔵野発の市民による自主的な取り組みが、今後、善福寺川流域（上流：武蔵野市、下流：杉並区）を舞台に、関係する自治体や市民をつなぐハブとなり、将来的に荒川、多摩川など、さらに大きな流域についてともに考え、実践する仲間の輪が広がっていくことを期待しています。

全体を通して、非常に密度が高く、普段とは異なる環境で自分の考え方や今後の方向性を見直すことのできる貴重な機会でした。参加者の皆様の専門性や活動内容が大変興味深く、今回限りで終わるのではなく、今後もそれぞれの活動について近況を共有したり、再び意見交換したりできる機会があれば嬉しく思います。次回に向けては、今回のような充実したプログラムを維持しつつ、参加者同士が自由に話せる時間や、得られた刺激を少し整理できる余白がもう少しあると、さらに深い交流につながるように感じました。

ポスター発表はとてもよかったので今後もやってほしいと思う。



とても充実しておりましたが、時間がタイトに感じました。特に合同WSは議論に時間が足らず、もう少し話せたらよいと感じました。



グループワークは地元の方が参加いただけたのでとても良い内容になったと感じました。もし、地元の方がいなかったら尻切れトンボになったかもなとは少しだけ感じました。

最後の温泉チームで発表した「縁とゆかりを作る多拠点共育」ですが、たとえば次の合宿のときに、今回の託児よりも大々的に子ども向けプログラムを作って、子どもは子どもで活動して楽しんでいる間、親は財団関係の研修を受けたり湯治したりするというパイロットケースみたいのをやるのはどうでしょうか？参加してくださった地元の親子はじめ、あんな風に提案して、コメントもいただいておいて結局ワークショップで提案しただけなので、やるつもり一切ありませんというのも失礼だし勿体ないなあと思いまして。



合宿形式であったことにより、通常の講演会や短時間の交流会では得られない、参加者同士の深い対話が生まれたと感じました。移動、見学、食事、温泉、ワークショップなどを共に過ごすことで、肩書や専門分野を超えて自然に会話が広がり、表面的な自己紹介にとどまらない交流ができました。特に、同じ部屋になった参加者とは、医療、AI、研究、起業などについて率直に話すことができ、非常に有意義でした。また、文化人類学、哲学、地域再生など、普段接する機会の少ない分野の方々とも、時間をかけて考えや経験を共有できたことは、合宿形式ならではの大きな価値だったと思います。

タフな内容でしたが、集中が継続できる範囲内でまとめていただくことができたと感じました。財団の皆様ともお話ができ、自分が思っていたよりも、研究成果のみではなく、どのような現場調査をしているかなどの過程にも興味を示してくださっていた点に驚きました。一般的な助成プログラムは成果物はもちろん重視しますが、過程に興味を示していただくことはあまりないので非常に印象的でした。



参加者の皆様から寄せられた具体的な声の一部を抜粋してご紹介！



特に助成2年目の皆さんの発表を聞くことができ、各自の研究がどのように進みどのような困難に直面しているのかも含めて大変勉強になりました。



中間報告会とワークショップを合宿形式で組み合わせ、さらに鳴子温泉というフィールドそのものを教材とする構成は、オンラインや日帰りの報告会では決して得られない交流と学びをもたらしてくださいました。



異分野の方々との対話を通じて、自分自身が医療という枠組みの中だけで物事を考えていたことにも気付かされました。専門性を深めることの重要性和同時に、異なる価値観や世界観に触れることが、新しい発想や社会実装につながることを実感しました。また、鳴子温泉では、地熱発電やウッドチップを活用した発電施設など、地域資源を生かしたサステナブルビレッジの取り組みを見学するとともに、実際に温泉や湯治文化の歴史について学ぶことができました。単なる視察ではなく、その土地で長く育まれてきた自然・文化・暮らしを体験することで、「地域の価値とは何か」を改めて考える機会となりました。

今回は、中間報告会の要素を強く打ち出しました。今回は、中間報告の他、鳴子温泉という地域性を活かし、地方と都市の豊かなつながり方についての研究プロジェクトを提案してもらう試みを行いました。この企画の狙いは、地方の地域課題を解決してもらうことではありません。さまざまな専門性を持つ研究者の方々が、同じ地域で同じものを見た時に、どのような課題感やアイデアが生まれ、どのように共同研究プロジェクトに落とし込むのかを体験してもらう中で、濃い密度での交流や、新たな研究の種が生まれることを期待しました。

事務局として意気込んで企画を立ててみたものの、それぞれに専門性を持ち、現在進行形で研究プロジェクトを実施している参加者の方々とって意義のあるワークショップとなるのかどうか、不安を抱えたまま当日を迎えました。結果として、合宿は参加者の皆様から高い評価を得ることができ、私たちの不安は杞憂に終わりました。

実は、合宿初日の夜からの大雨により、交通の要であるJR「陸羽東線」が丸一日運休とな

り、参加者の方の帰りの手段が絶たれるというハプニングに見舞われました。急遽、大型バスを手配し事なきを得ましたが、このことは、思わぬアクシデントとしてだけでなく、地方と都市の関係性を考えるワークショップの延長として地方の課題を浮き彫りにし、参加者へのよい「お土産」にもなったのではないかと思います。

さて、このように、非常に濃厚な中間報告会・ワークショップとなりましたが、更に予想を超えた展開が生まれています。合宿終了後、合宿のまとめレポートや、より具体的な研究計画が、私たちの手元に届けられました。

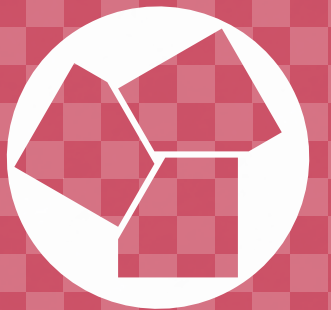
また、「縁とゆかりを作る多拠点共育」を提案してくださったグループは、自主的に家族や友人を連れて鳴子温泉を再訪し、大人も子どもも交流する機会を作ってくださいました。鳴子温泉在住の筆者も家族ぐるみで参加し、ワークショップで生まれた「つながり」がさらに太くなり、新たな提案に展開していく過程を目の当たりにしました。

トヨタ財団が助成する方々の専門分野は多種多様です。その方々に積極的に議論や交流の場を提供していることが、トヨタ財団の特徴にもつながっていると考えています。対面での交流を、意義のあることだと信じ込んで実施してきた側面もあるのですが、実際にそこから新しい研究の種が生まれつつあり、交流の意義が実証されたように感じた2日間でした。今後さらなる展開が生まれるかもしれません。楽しみながら伴走していければと思います。

合同合宿の様子は、トヨタ財団YouTubeチャンネルにて公開する予定です。



トヨタ財団2026鳴子合同合宿パンフレット



REPORT

国内助成プログラム同窓会企画
「ウェルビーイングな地域
デザインを考える2日間
研究セミナー」in 五城目

7 月27、28日の2日間にわたり、秋田県南秋田郡の五城目町にて、2026年度「国内助成プログラム」同窓会企画を実施しました。五城目町は人口減少と高齢化が進む地方町村でありながら、多様な主体によるまちづくりの挑戦が次々と生まれています。大変注目される地域とあって、今回

ことを確認しました。

今後もトヨタ財団は、対話と学びの機会を通じて、よりよい社会のあり方を考える取り組みを続けていきます。また、本企画では、参加者のみなさまはもちろん、事前準備や現地での対応など多数の方にご協力いただきました。本当にありがとうございました。

*

本記事の詳細はトヨタ財団ウェブサイトにて公開する予定です。また、参加者の一人、いたやゆかりさんのnote記事（「秋田・五城目で考えた「ウェルビーイングな地域デザイン」―油を売る暮らし、生態系のような町―も、併せてご覧ください。



の参加募集は締め切り前に定員に達するほど強い関心が寄せられました。

なお今回は特定課題「人口減少と日本社会」との合同企画として、2024年度の助成先である高橋今日子さんにプランをご提案いただきました。現地参加13名、オンライン参加2名の計15名が全国各地から集まり、「ウェルビーイングな地域デザインを考える2日間研究セミナー」が始まりました。



高橋さん率いる「ウェルビーイングな地域デザインプロジェクト（TOYGOJOME）」チームは、秋田魁新報社が主導する、秋田ならではの「幸せ」を考える「What's up? AKITA」みんなの幸せアゲプロジェクト」に共同参画しています。高橋さんチームは同社のプロジェクトで実施する4つのアクションのうち、アクション2にあたる、日々の暮らしにおける「大切な時間」をテーマに、秋田の「幸せ」を考える大規模誌面調査と写真応募キャンペーンを主に担当されています。

2日間にわたる研究セミナーでは、高橋さんから「ウェルビーイング」について議論の土台となる基礎知識を共有していただいたほか、地

INFORMATION

共創型エキシビジョン

The Toyota Foundation Day開催

ト ヨタ財団では2026年11月2日、3日の両日、助成プログラムを横断し、多様な分野のプロジェクトを広く紹介する一般公開イベント「The Toyota Foundation Day（ザ・トヨタ・ファウンデーション・デー）」をTODA HALL & CONFERENCE TOKYOにて開催いたします。

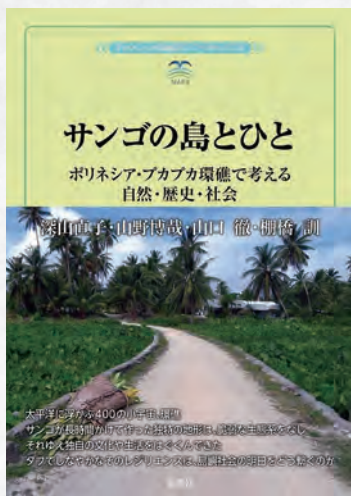
2026年度、国内・研究・国際
プログラムの助成対象決定

2 026年春に公募を行った国内助成プログラム、研究助成プログラム、国際助成プログラムの助成対象を、外部有識者（学識経験者及びNPO関係者）によって構成される選考委員会にて選考を行い、理事会にて決定されました。

詳しくはトヨタ財団ウェブサイトにてご確認ください。

PUBLICATIONS

『サンゴの島とひと』



2 017年度研究助成プログラムの助成対象プロジェクト『気象災害連鎖を生き抜くオセアニア環境社会の戦略——アトール・レジリエンス解明に挑む——』（代表者：深山直子）の成果物として、『サンゴの島とひと——ポリネシア・太平洋環境で考える自然・歴史・社会』が刊行されました。

サンゴが作り出した脆弱な生態系と独自の文化が育んだレジリエンス（回復力）を考察し、島嶼社会の明日に迫る一冊です。ぜひご覧ください。

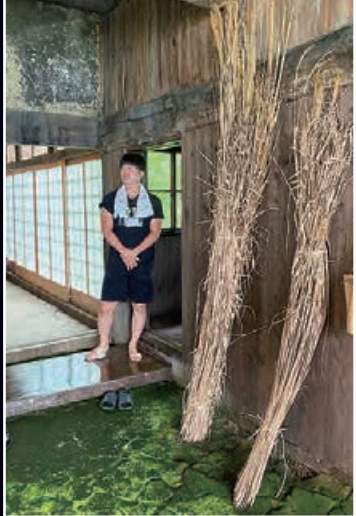
サンゴの島とひと
——ポリネシア・太平洋環境で考える自然・歴史・社会——
出版社：風響社
著者名：深山直子・山野博哉・山口徹・棚橋訓著
定価：本体900円＋税



域で暮らす方々をお招きしてのゲストトークや、ユニークな取り組み先を見て回るフィールドワークも企画していただき、五城目の暮らしやまちづくりの工夫の現状、課題について関係者の皆様にお話をうかがいました。参加

最 後に小グループに分かれて2日間の所感を述べあったところ、五城目の風土から生まれる営みに感動したこと、住民の五城目への愛を感じたこと、あるものを使い、モノを所有ではなく共有すること、長い時間をかけて話し合って決めるプロセスがとられていることなどが共通して参加者の心に強く残ったようでした。これらは生態的処方、郷土愛、ポスト資本主義、ダイヤログといった、さまざまなキーワードと結びつけて考えられ、一つ一つの感想が大きなテーマに発展しうるものでした。

ウェルビーイングとは何かについては、一つの答えに収斂するものではなく、多様な視点の往復の中でこそ、次の問いが見えてくる



左ページのシェアビレッジ町村の屋根を拭くための茅[C.H.]

【編集後記】

EDITOR'S NOTE

●「今後10年以内にAーが人類を滅亡させる可能性は10%以上」

先日ニュースで見たAー研究者のコメントです。「そんなバカな」と思いながらも、家に帰ると、娘が彼氏への別れ話のロジックをAーに作らせていて、違う意味で「世も末かも」と思っていました。

これまでパソコンはゲームでしか使っていなかった息子も、学校の志望理由をAーで作成。「チャッピーって芸能人？」と言っていた家内までもが息子のサッカー部保護者会での余興をAーで企画、などなど知らないうちに我が家もAーに侵食されており、Aーの浸透のスピードをあらためて実感しています。

一方で、むやみやたらにAーを使うことの怖さも体感しました。先に触れた家内がAーで企画した保護者会の出し物は「サッカーW杯クイズ」だったのですが、「Aーで問題作ったから一応チェックして」と言われ見てみたところ、第1問「ジーコ、岡田武史、ザッケローニ、この中で一番早くW杯日本代表監督に就任したのは？」回答「ジーコ」、第2問「日本代表のW杯初勝利の相手国は？」回答「チュニジア」。サッカーに詳しい方はおわかりかと思いますが、なんと2問とも不正解。サッカーに詳しくない家内は、Aーの出した答えを正解だ

と信じこんでいたようです。

Aーの回答は必ずしも正しいとは限らない、というのにははや常識ですが、やっぱりセルフチェックは重要、と家族一同反省しきりでした。Aーの導く未来は果たして幸せな未来なのか、本当に悩ましく、難しい問題です。[N.K.]

●●今号では「おじやまします」の執筆を担当しました。活動現場で雨水のことを考える機会を頂いて以来、行政区ではない「流域」単位で地域を捉えることに関心が深まっています。

その後、出張で「流域（粋）」の視点を活かして取り組んでいる「流粋暮らしづくりネットワーク」の皆さんの現場（長野県王滝村）へ訪問する機会に恵まれました。訪問先の取り組みの一つである「アウトライン風景」というポッドキャスト番組を聴きながらの道中は、特別な時間でした。

当番組では、王滝村に暮らしたり、関わるひとの記憶や大切な心の風景が語られます。そして、いつか流域の人たちが旅をした際、「もしかしたらこれは誰かの風景だったかも」と思い出し、そこから各々が新たな風景を見出すことにつながるれば、

との想いが込められています。

私も語り手の人生に想いを馳せつつ、ふと「自分にとって大切な心の風景とは何だろう？」と想像しました。浮かんできたのは、生まれ育った藤沢市菟浦沢という集落の、今は整備され消えてしまった小道や栗畑、通学途中に通っていた林を抜けた先に広がる田んぼの風景、そして祖母の家、そんな風景でした。なかでも、祖母の家は、昔も今も、私にとって素に還り、心を落ち着けられる場所であること、そして「心の風景」は、誰にも置き換えられない自分だけのものだということに改めて気づかされました。

皆さんにとって「大切な心の風景」とはどんな風景でしょうか。いつかお聴きたいです。[K.T.]

●●●今回の対談は1部と2部に分けてお話しいただきました。本誌には1部しか掲載できませんでしたが、ぜひウェブサイトにて2部もお読みいただければと思います。そして、11月2日、3日には初の試みとなる大型イベントを開催いたします。盛りだくさんの内容で皆様のお越しをお待ちしております。[Y.N.]

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS

JOINT

本誌送付先の変更等がありましたら、右のQRコードを読み取ってお知らせください。



JOINT [ジョイント] No.52

発行日 2026年10月20日
発行人 山本晃宏
編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] <https://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。

On The Journey
—旅の途中で—

国内助成プログラムの同窓会企画にて訪れた、明治期に建てられた築140年を越える茅葺き古民家を活用した、共創型コミュニケーション兼宿泊交流施設「シェアビレッジ町村」(P32参照)。●写真撮影：鷲澤なつみ





公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト
<https://www.toyotafound.or.jp/>

